

# 霞

—2013年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館

平成26年1月5日発行(通巻第26号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(26) 古写真 「土浦区裁判所」



大正時代の土浦区裁判所です。明治のはじめには、旧外丸御殿(旧藩主の居宅)の建物に聴訟課・断獄課がおかれ、その後裁判所となりましたが、明治38(1905)年3月に全焼、同39年1月に新築落成したのが写真の建物です。昭和46(1971)年まで使用されました。【情報ライブラリー検索キーワード「裁判所」】

### 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(26)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展示会と催し物等】
- 奈良三彩(古代)・・・2
- 青磁花瓶(中世)・・・3
- 塾の教科書(近世)・・・4
- 棟札に残されたもの(近代)・・・5
- 裁縫雛形(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「バックヤードで働く人々①」・・・8
- コラム(26)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

### ★★館長講座(茂木雅博館長)★★

- 1月19日(日) 霞ヶ浦沿岸の貝塚—縄文時代後期・晩期の貝塚—
- 3月16日(日) 武者塚古墳について

いずれも午後2時~3時30分 会場:博物館視聴覚ホール

### ★★参考展示「昔の暮らしの道具」★★

12月10日(火)~1月26日(日)

小学校3年生の校外学習に合わせて、ちょっと昔の暮らしの道具をご紹介します。

### ★★どんど焼き★★ 1月11日(土) 午前11時点火

会場:桜川河川敷(学園大橋下)

正月飾りを燃やし1年間の無病息災を祈ります。先着200名にお餅を配布します。

### ★★はたおり作品展★★ 2月22日(土)~3月2日(日)

はたごしらえ講座受講生・むいむいの会・綿の実の会の作品を展示します。

### ★★第35回特別展「幕末動乱—開国から攘夷へ—」★★

- 3月21日(金)~5月6日(火) 関東における幕末維新期の動乱を主題とし、四館共同企画展として開催します。
- ・日野市立新選組のふるさと歴史館 5月17日(土)~7月13日(日)
- ・壬生町立歴史民俗資料館 7月26日(土)~9月15日(月・祝)
- ・板橋区立郷土資料館 10月4日(土)~11月30日(日)

### ★休館のお知らせ★

- ・毎週月曜日(但し1月13日を除く)
- ・年末年始(12月28日~1月4日)
- ・1月14日(火)
- ・2月12日(水)
- ・3月18日(火)~20日(木)
- ・3月25日(火)

### ★祝日開館します★

- ・1月13日(月)
- ・2月11日(火)
- ・3月21日(金)

### ★無料開館日★ ※展示室1・東櫓のみ公開

- ・3月15日(土)・3月16日(日)



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

さんさい  
奈良三彩

みやこ うつわ  
— 都の器がもたらされた所 —

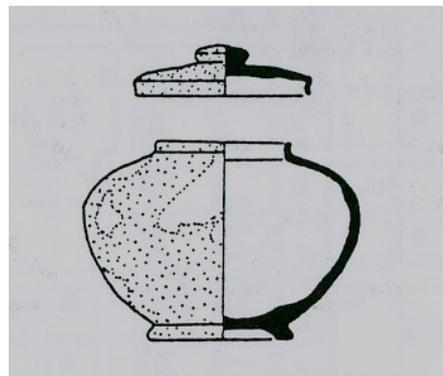
今回ご紹介する資料は、市内田村町の石橋北遺跡から発見された奈良三彩です。奈良三彩は、奈良時代に畿内地方で生産され、黄褐色・緑色・白色の三色に彩られた高級陶器です。中国の唐三彩の技法を導入して作られた美しく華やかな器で、平城の都の文化を象徴するものと言えます。奈良三彩の製作に関わる遺跡はまだ発見されていませんが、朝廷直轄の特定の工房で独占的に生産していたのではないかと考えられています。

石橋北遺跡から出土したものは、葉壺のような形で「三彩小壺」と呼ばれています。三彩小壺は、奈良県奈良市柘植の小治田安方侶の火葬墓（墓誌銘：天平元年・729年）から出土したものが最古の例で、奈良三彩の中でも最も出土数が多く、九州の福岡県から東北の福島県までおよそ90の遺跡から出土しています。その中でも多いのは古代の祭祀関係遺跡で、とくに福岡県宗像市沖ノ島遺跡、岡山県笠岡市大飛島遺跡、三重県鳥羽市神島遺跡などが注目されます。これらの遺跡からはそれぞれに古代の祭祀に関わる奉獻品の数々が発見されていますが、沖ノ島は玄界灘に浮かぶ孤島、大飛島は瀬戸内海に点在する笠岡諸島のひとつ、神島は伊勢湾口に位置する小島で、いずれも海上交通の安全を祈願して祭祀を行った跡と考えられています。

石橋北遺跡は、霞ヶ浦の土浦入りに面する台地上に位置しています。三彩小壺が発見されたのは、平安時代前期（9世紀）の竪穴住居跡と掘立柱建物跡で、いずれも小さな破片で出土しています。奈良時代（8世紀）に畿内地方で製作された高級陶器がこの地に伝わり、平安時代の遺跡に埋没するまでの背景や経緯には興味深いものがあります。三彩小壺の代表的な出土遺跡からその性格の一端を想像するに、この器は仏教や神祇祭祀など宗教的な役割や目的の下にもたらされ、長く珍重されていたのではないかと考えられます。遺跡のあるこの地は、古代の天津郷にあたります。当時霞ヶ浦は流れ海と呼ばれ太平洋に通じており、土浦の入り江には大規模な港湾つまり「大きな津」が営まれていたことは容易に想像され、出土した三彩小壺もこれと歴史的に深く結びつくものと思われる。（塩谷 修）



石橋北遺跡から出土した三彩小壺破片  
（当館所蔵）  
（上の大きな頸部片は全体に釉薬が剥落しています）



沖ノ島遺跡の三彩小壺実測図  
『宗像沖ノ島』1979年より

2/1（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも古代コーナーに展示）

- 田村・沖宿遺跡群出土二彩陶器（唾壺）
- 田村・沖宿遺跡群出土緑釉陶器（椀）



## 2013年度 冬季の展示資料解説② 中世

せいじ かびん

# 青磁花瓶

## — 寺院の威信財として —

市内高岡の法雲寺には、「霞」第25号で紹介した「青磁三階塔」以外にも、古い青磁の置物がもう1点伝わっています。法雲寺に関する様々な事がらを記した「法雲寺雑記便覧」の「法雲什物雑記」「古器附録」の中に「青地花瓶 壺 世に言う天龍寺焼なり少し破損に及ぶ無害なり」と記されています。また、この花瓶が納められていた箱の内側には、箱を組み立てる前に記したのでしょうか。四面のうち三面を使って大きく墨書してありました（下記参照）。墨書をしたのは、「霞」第24号で紹介した法雲寺第40世靈戒和尚（珂月禪師）です。

全体の形は、高台から上半部へと緩やかに立ち広がり、肩部やや下側で最も膨らみをみせています。また、製作工程における僅かな輪積みの痕跡を残しつつ成形し、丸みを帯びた優しく美しいフォルムをしています。頸部は、ほぼ垂直に立ち上がり、先端が僅かに外反する箇所が一部見受けられます。胴部下半に2本、肩部に3本、頸部下半に3本の突帯を廻らして変化をつけています。かなり大型の花瓶であることから、粘土を積み重ねていく過程で崩れないよう、下部、胴部、肩部、頸部を乾燥させながら順番に積み重ねていったものと考えられます。重ね合わせた接合部は強度が弱いため、突帯はこれを補強する意味もありました。少なくとも頸部は後から付けたようで、口の内側部分を上から覗いてみると、胴上部の端がハの字状に内反して成形され、それよりも外側から頸部が立ち上がっているのが分かります。胴部中央には、青磁の見所となる貫入（焼成後に生じた釉薬のヒビ）がしきりに入っています。文様はみられず、釉薬は厚く緑味が強い点から中国の元代でも末期以降の作と考えられます

この花瓶は、法雲寺を創建した復庵和尚（1280～1358）の時代に中国（元）よりもたらされた可能性があり、寺院の威信財のひとつとして伝わってきたものと思われる。（中澤達也）

### [墨書]

雄山古来所蔵青藝瓶壺  
筒高壺赤九寸  
五分（59.0cm）口径五寸五分（16.7cm）  
腹周三尺三寸三分（100.9cm）  
底径六寸（18.2cm）瓶嘴少缺  
矣干時弘化四年歲  
在丁未秋九月修補  
之有古桐箱革造  
以蔵之

靈戒識

（原文縦書き）



青磁花瓶（法雲寺所蔵 当館寄託）

3/1（土）午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも中世コーナーに展示）

- 草坐釈迦（県指定文化財）
- 靈戒和尚像（40世）
- 青磁三階塔



# 塾の教科書

おがたぶんじろう てならいほん  
—尾形文二郎の手習本—

文二郎（11歳）「先生、お手本を書いてくださり、ありがとうございました。」

沼尻墨僊「商売往来には商人の基本が書いてある。しっかり学ぶのだよ。」

墨僊塾ではどのような教科書が使われたのでしょうか。塾生の一人、尾形文二郎（文次郎とも）が使っていた教科書6冊（「商売往来」4冊、「消息往来」「日用翰牘」各1冊）が生家に保存されていました。

文二郎は天保13（1842）年、尾形徳兵衛（三代目）の息子として生まれ、嘉永3（1850）年1月15日、数え9歳で墨僊塾に入門しました。尾形家は屋号を大国屋、徳兵衛と合わせて「大徳」と呼ばれ、文二郎が生まれた頃には土浦で呉服・穀物・粕・干鰯を扱う大きな商家でした。

初代徳兵衛は香取神宮の神官尾形数馬の四男として生まれました。23歳のとき、伊勢国射和（現三重県松阪市）出身の豪商国分勘兵衛（大国屋）の土浦店に奉公し、16年の修業が実って支配人に昇進、天明5（1785）年45歳のとき暖簾分けを許されて独立しました。

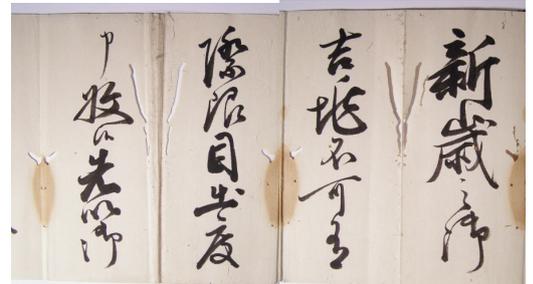
文二郎がお手本にした「商売往来」は墨僊の直筆です。最後の部分に「嘉永5年2月15日、11歳になった文二郎に書き与えた」と記してあります。寺子屋や塾では、筆子（塾生）の進捗に合わせた手本を師匠が書き与え、それを教科書として用いました。

「商売往来」の次は、つきあいに関わる手紙の例文がいくつも書かれてる「消息往来」を、その次には「日用翰牘」を学びました。

「日用翰牘」には、新年の挨拶・お客様の招待・伊勢太々神楽講代参祝い・元服祝い・留守の詫び状・新築祝い・奉公への出立祝い・暑中見舞い・取引先への礼状など、商家の交際に必要な手紙の文例が満載されています。このとき墨僊は78歳、文二郎は12歳でした。それでは、文二郎は大徳を継いだのでしょうか。いえ、継ぎませんでした。大徳では商才に長けた婿を娘に迎えていました。父の三代目徳兵衛も府中平村（現石岡市）から迎えられた娘婿です。四代目を継いだのは、同じく府中平村から娘たみに迎えた婿でした。

墨僊はいずれ生家を出て行かねばならない文二郎の運命を知っていたのでしょうか、一人前の商人として知っておくべき手紙文を文二郎に書き与えたのです。すぐに実用の糧となったことでしょう。

（木塚 久仁子）



「日用翰牘」（当館所蔵）

1/18（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください（いずれも近世コーナーに展示）

- 式目（大国屋徳兵衛家）文化7（1810）年
- 目録下書（大国屋徳兵衛家）



むなふだ

# 棟札に残されたもの

## —土浦中学校と土浦区裁判所—

土浦の近代を代表する建物に、明治37(1904)年上棟の土浦中学校旧本館(国指定重要文化財)があります。土浦第一高等学校敷地内に残された、この西洋風ゴシック建築には、「上棟式 大棟梁 茨城県技師工学士駒杵勤治」と記された棟札が存在します。

駒杵勤治(1877~1919)は、東京駅の設計で知られる辰野金吾(1854~1919)に東京帝国大学工科建築科で学んだのち、茨城県に2年3ヶ月奉職した人物で、県内の学校や警察署など多くの建築物を設計しました。本格的な西洋建築の技術や様式を学んだ人々が指導者となり、活躍したのがこの時代でした。

さて、実際の建築には、ほかにどんな人々が携わっていたのでしょうか。土浦中学校の棟札の裏面には「明治三十七年七月五日 請負人石井権蔵」とあります。土浦中学校には、石井権蔵率いる石井組の人々が関わり、また毎日の工事監督には塚越斧太郎、職人として青木一家が関わりました。近年土浦一高を訪れた青木家のご子孫の記録によると、青木家は静岡県出身で、家族や弟子を連れ、一家をあげて移動しながら、各地の建築に関わったそうです。明治36年頃石井組専属となり、土浦では土浦中学校と土浦区裁判所を手掛けていると聞いているということでした。

近年確認することができた土浦区裁判所の棟札に、注目すべき点がありました。

「明治三十八年十月一日挙行」とある反対側の表面に並ぶ工事関係者名のなかに、「工事請負人 石井権蔵」「工事請負代理人 塚越斧太郎」、さらに「大工棟梁 青木仙次郎」「大工棟梁 青木松次郎」と青木の名が墨書されていたのです。青木家では、松次郎と仙次郎は叔父・甥の間柄で、特に難しい仕事はコンビを組み、ぴったりと呼吸の合った仕事をしていたことを記録していました。

土浦区裁判所の建物は、昭和46年に鉄筋コンクリートに建て替わり、残念ながら現存していませんが、使われていた建材は堂々たるもので、腐朽も極めて少なかったそうです。棟札は、先進的な建築を学んだ指導者、各地を歩き腕をみがいた職人、そしてそれらの影響を受けた地元の職人たちの力が結集した証といえます。(野田礼子)



「土浦区裁判所棟札」(当館所蔵)

1/25(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください(いずれも近代コーナーに展示)

- 土浦区裁判所写真絵葉書(大正時代)
- 土浦中学校建築部材



さいほうひながた

# 裁縫雛形

## —ミニチュアの着物—

一昨年の特展「暮らしをささえる女性たち」では、農家のはたおりと女性たちの針仕事をご紹介しました。展覧会は新しい資料の収集を図るきっかけとなり、調査研究が進展する機会にもなります。また、会期中や終了後に展示をご覧になった方から資料を寄贈していただくことがあります。今号では特別展前後に収蔵された資料のなかから「裁縫雛形」をご紹介しましょう。

裁縫雛形は明治時代から昭和時代にかけてつくられた衣服や生活用品のミニチュアです。渡辺学園（現東京家政大学）の初代校長である渡辺辰五郎が明治7（1874）年に考案したもので、雛形尺という物差しを使って実寸よりも小さく着物などを仕立てていきます。小さく作れば時間の節約になり、使う布地も少なく、収納の場所もとりません。地方の女学校や裁縫所でも、雛形を使って裁縫が教えられていました。

かつての土浦町にはいくつかの裁縫所があり、農閑期には県南地域から多くの女子がやってきて針仕事を学びました。遠方からの場合は「居付き」とよばれる泊まり込み、近隣からは「通い」で裁縫を学びました。

大正10（1921）年生まれの美並村（現かすみがうら市）出身の女性は、土浦高等女学校（現土浦第二高等学校）を卒業後、土浦町（当時）の「霞裁縫女塾」に居付きで裁縫を学びました。保管していた雛形には、長着や袴・帯のほか布団や蚊帳・油単（たんす覆い）などがありました（写真参照）。生活に必要なさまざまな用品の作り方を学んでいたことが分かります。袴の雛形には紙製のものもありました。雛形とともにたくさんの「折形」も保管されていて、「折形」の作法や水引の結び方も学んだようです。裁縫所では行儀や作法も教えていました。

大正12年生まれの九重村（現つくば市）出身の女性は、土浦町の「加藤裁縫所」で学びました。農閑期に3年間、30人位の女性と一緒に寝泊りをして学んだそうです。風呂敷に包まれた雛形とともにノートが保管されていました。先生の板書を写したノートには、細かく書かれた文字と丁寧なスケッチがみられます。裁縫を一生懸命に学んでいた様子がノートからも伝わってきます。

この他にも、亡くなった家族の遺品から見つかった裁縫雛形をいくつか寄贈していただきました。裁縫の教科書や針仕事の道具を寄贈してくださった方もいました。かつて多くの女性たちが裁縫を学び、そうした時代の記憶とともに、裁縫雛形は大切に保管されてきたようです。

（萩谷 良太）



裁縫雛形（当館所蔵）

2/22（土）午後2時から  
このページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記もあわせてご覧ください

- 土浦地方のはたおり道具（当館所蔵）（近代コーナーに展示）
- 自家製の繭から糸を引いた長着（当館所蔵）（近代コーナーに展示）
- はたおり作品展（2月22日～3月2日）



# 市史編さんだより

## —続『土浦の文化財関係史料集』余録—

雪傳和尚頂相贊（Ⅰ—1 vi）と幻室和尚（Ⅱ—三 1 iv③）について

「霞」第 21 号で、小田政治肖像画の贊が左から右へ読むと紹介しましたが、その続きで二つ紹介します。一つは、雪傳和尚頂相の贊も同じ読み方だったことです。実はこの読み方については、「図書」（岩波書店 2002 年 6 月号）に屋名池誠氏が「縦書きの奇妙な世界」の題で、15 世紀（室町時代）に「画贊は描かれた人物の顔の向いている方が先頭行になる」という規定が存在していたと書いています。宋元から伝わった禅宗では師嗣相承を重んじ、それを象徴的に表すのが頂相の授与で、そうした伝統の中で、画贊の、顔が左向きは左から右へ、顔が右向きは右から左へ読む、というルールが確立するのだそうです。私が『史料集』を編さんするとき、これをすっかり失念していたのです。この読み方で雪傳和尚贊を読んでみましょう。

謹甫的子 大模遠孫 従前踏着 檠嶠高蹤乎

威音行道 身後坐断 靈岳上首乎

諸仏本源 旧規云復

嘉臺猶存巢月 明鑑現道容四来

鶴望法王頂門 添意魅一默雷奔 咄々々

真風難画 以何持論

歴劫坦然無異色 百年東海鉄崑崙 唵

前住徳禪雪傳版首禪師肖像 小師月堂座元求拙贊 書以充巢月院常住供養云

天正十三祀乙酉林鐘中浣日 前大徳見龍翔明叔叟宗哲迅毫

全体が起承転結の形式を為し、1・2 行目は従前・身後の語や乎を末尾とする対句を持つ起句、威音は威音王仏、過去 莊嚴劫最初の仏のこと、禅では威音王以前といえば本来の面目をいいます。3 行目はそれを承けた句で、諸仏の本源に到達した、の意と解しておきます。旧規が何を指すかは分かりませんが、復は還・帰（かえる）、反（かえす）の意で、本来の面目に帰る（復す）意でしょうか。4・5 行目は転じて雪傳和尚の現況を述べ、最後の 2 行は和尚を称える語で結んでおります。明叔宗哲の肩書きの「大徳」は大徳寺、「見龍翔」の見は現で、龍翔は龍翔寺ですが所在は分かりません。その他のことは『史料集』の注と、「霞」第 21 号の中澤達也学芸員の展示資料解説②「雪傳和尚像」をご覧頂きたいと思います。

もう一つは別の話ですが、幻室和尚についてです。『史料集』の注に「幻住派の一華碩由から十一代目に幻室明哲がおり、その人か。詳細は不明である。」と書きましたが、松田紹典氏の「死と転生」（聖和学園短期大学紀要「聖和」）では、臨濟宗妙心寺派江南殊栄の弟子で、小田の巢月院にいた大蟲宗岑とは同輩の、妙心寺派の系図に鷹岳玄揚とある人と紹介しています。大蟲和尚は戦国期の僧で、のちに下野の雲巖寺中興の祖となった人ですが、雲巖寺に和尚の伝記である「大蟲和尚長沙録」（二巻）があります。その書と鹿島の根本寺の歴代帳をつきあわせると、幻室和尚は根本寺 16 世で幻室修西堂とも云われ、天正 3（1575）年に亡くなっています。『史料集』に載せた 2 つの「幻室和尚偈」の一つには天正乙亥とあり、乙亥は 3 年に当たります。なお、韻文の形をとる禅の法語類を偈といいますが、和偈としたのはこの法語の文中に「強而和其韻者也」とあるのに合わせたのでしょう。

根本寺は芭蕉がここに師の仏頂和尚を訪ね、「鹿島紀行」を著したことでも有名です。鹿島神宮の神宮寺だったともいわれますが、神宮とは所領や主導権を巡り長い間争い、殊に幕末天狗党と神徒による徹底的破却にあったこともあり、今では小さな寺になっています。（社会教育指導員 雨谷 昭）

# 霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、当館非常勤職員の木村利栄が執筆いたしました。

## バックヤードで働く人々①—キャプション製作の現場から

キャプションとは、展示資料の脇に添えられている解説文の板のことです。意外に思われるかもしれませんが、多くの博物館・美術館では、そのほとんどを館内で製作しています。当館も例外ではなく、キャプションはもちろん、写真パネルなども館内で製作しています。館内で印刷できない大型のものは外注しますが、それも印刷のみの依頼で、切り出しなどの成形作業は私どもで行っています。キャプション製作の大まかな流れは、展示担当者との打ち合わせでレイアウトや使用色（展覧会のテーマカラー）を決定→担当者から支給された原稿をパソコンの専用ソフト上に入力→校正→印刷→スチロール製の糊付きパネルに貼って切り出す、となります。薄暗い展示室内でもなるべく読みやすいような文字のサイズや配色を心がけていますが、解説文の文字量と文字のサイズの間には反比例の関係があるため、お客様から「文字が小さくて読めないよ」とお叱りをうけることもしばしばです。

展覧会開幕の一週間前には、季節展示用の資料と展覧会用の資料の入れ替え作業が始まります。それまでに、全てのキャプションとパネルを完成させなければなりません。ひとつの展覧会で使用するキャプション類は、その時々展示形態にもよりますが、テーマ展などの小規模なもので70～100枚前後、特別展規模になると平均で250枚前後、多いときには400枚近くになる場合もあります。入れ替え作業の直前には、学芸係に所属する数名の非常勤職員が総出でカッターを手に黙々とキャプションを切り出していきますが、短期間でこれだけの量を製作するのは、正直、非常に辛い作業です。集中力が低下すると目測を誤って指を切ってしまうこともあり、常に生傷が絶えません。展覧会の脇役たち—キャプションやパネル—は、私どもの汗と涙（！？）の結晶でもあるのです。

（学芸係非常勤職員 木村利栄）

### コラム(26)—LED照明への切り替え—

平成26年1月から博物館のスポットライトがLED照明に切り替わりました。これまでは、1台100Wのスポットライトが130台近く設置してあり、博物館の毎月の電気代は季節にもよりますが、かなりの金額となっていました。10年ほど前から、幾つかの節電対策を実施し、それなりの成果はありましたが、お客様対応の施設としては限界がありました。

東日本大震災の後には、全国的に節電が叫ばれるようになり、LED照明が脚光を浴びるようになりました。博物館でもLEDライトの設置には前向きでしたが、歴史資料の保護と資料を見せるといった点、それと価格の面で中々適したものが見つかりませんでした。LEDライトは従来のスポットライトに比べて明るく、ホワイテ感が強いので、資料を見せるうえでは適さなかったのです。この点を改善したものが近年製品化されたことから、検討のうえ博物館で設置することになりました。1台100Wだったものが1台10Wとなります。資料をより良く見せる点では、今一歩といった感じですが、節電への効果に期待したいと思います。

（中澤達也）

### 情報ライブラリー更新状況

平成23～24年度に制作した『茨城県指定無形民俗文化財田宮ばやし』の映像を追加しました。概要版（67分）の他、「大杉ばやし」「癒癒ばやし」など7つの曲目を個別に収録した映像（1～5分）をご覧ください。

霞（かすみ） 2013年度  
冬季展示室だより（通巻第26号）

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2014年度春季展示は、2014年5月13日（火）～6月下旬となります。「霞」2014年度春季展示室だより（通巻第27号）は5月13日（火）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。（カラー）